# 自閉的傾向のある児童生徒の「心理的安定」を目指した支援に関する考察（5）
## －自立活動に重点を置いた取り組みを通しての考察－

# A Study on Support Methods Aimed at Promoting the Mental Stability of Children with Autistic Tendencies (5)

（2015年３月31日受理）

松田　文春*　福森　護
Fumiharu Matsuda　Mamoru Fukumori

Key words：自閉症，特別支援学級，自立活動，道徳教育

## 要　　旨

中学校特別支援学級（知的障害）に在籍する自閉的傾向の強い生徒の自立活動における支援方法について考察した。特に，共同学習の場面で他者を肯定できる姿勢を身につけ周囲のペースに合わせて活動に取り組むことは，自身の心理的安定を助長させ集団内での居場所を確立することができ，落ち着いて学習に取り組もうとする前向きな姿勢が大きく育った。また，個々の生徒の特性に沿って自立活動に道徳教育的観点を盛り込んで支援を行うことで，自立活動と道徳教育のねらいを相乗的に高めることができる。そして，そのことが各々の客観的なものの考え方を育み，集団のまとまりを一層深め，学習効果を高めることにも効果的であることを実践事例をもとに考察した。

## １．目　　的

中学校特別支援学級に在籍する自閉的傾向の強い生徒の自立活動における具体的な支援の実際について，その有効性について考察した。個々の生徒の特性に沿って，自立活動（集団活動）での有効な支援方法を確立することで，学校生活全般での心理的安定を実現し，生きる力の育成につながり，さらには学校教育修了後の社会参加をより容易にするための有効な手立てにもなると考えた。ただ，自立活動単独での実践ではなく，活動の成果をより一層高めるために，道徳教育的観点を盛り込むことで，系統的な実践方法の確立を目指した。生徒の特性は，個々により大きく異なるので，支援方法が一律に作用するとは言いにくい。そのため本論は，より多くの具体的実践例をもとに，有効性があると考えられる最小必要限の要素を提案することを試みた。

## ２．方　　法

（１）対象生徒

中学校特別支援学級（知的障害）に在籍する自閉的傾向の強い生徒を対象とした。過去３年間のうちに学級に同時期に在籍した生徒４名（いずれも男子Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ）を対象とし，共同学習場面での実践研究に取り組んだ。Ａ～Ｄの個々の実態は以下の通りである。（検査結果は除いて記載）

Ａ…自閉症。軽度の知的障害を伴う。予期せぬ出来事に強い不安感をもち，パニックになりやすい。パニックになると，他傷行為を伴う。自己の価値観に基づいて行動するので，それが受け入れられないと感じると行動がしばしば中断し，集中力が持続しにくい。

Ｂ…自閉症。中度知的障害を伴う。行動面で強いこだわりがあり，他者の意見を受け入れにくく，自分の本能のままに行動しようとする。それが阻害さ

*井原市立井原中学校

れるとパニックを起こし，アニメのキャラクター名を反復して言い，しばらくの間興奮状態が続く。

C…自閉症。軽度知的障害を伴う。向上心が強く自ら進んで行動しようとするが，自分の思い通りにものごとが進まないと極端に落ち込み，立ち直るのに非常に時間がかかる。他者と比較し優越感を持ち，見下した言動をとることがよくある。

D…自閉症。軽度知的障害を伴う。心理的に好不調の波が大きい。不調時には活動にほとんど取り組めず，他者に攻撃的な態度をとることがある。手先は器用で，細かい作業にも意欲的に取り組むことができる。

個々には上記のような実態であるが，学習活動場面で以下のような，４名に共通する特性がある。

・一定時間（１単位時間）集中して学習活動に取り組むことができにくい。
・自分のイメージ・ペースで行動し，集団のペースに合わせて行動することができにくい。
・自分の価値判断に沿わない状況を受け入れることが難しく，パニック傾向になりやすい。

（２）ねらいとした自立活動の項目

・心理的な安定…・情緒の安定に関すること
・障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること
・環境の把握　…・感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関すること
・身体の動き　…・作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること

これらの項目は個人によりねらいの比重が異なる場合があるが，４名に共通する全体目標的な観点として設定した。

（３）設定した自立活動の単元

「貼り絵」，「ペーパークラフト」の二本立て。これらはともに共同製作としての要素を取り入れている。まず初めに貼り絵の製作から取り組み，次にペーパークラフトに取り組んだ。手指の巧緻性を徐々に高めるという意味で，その順序にした。どちらの単元も，個々の実態に合わせて役割分担を決め取り組んだ。実際には，個々の役割分担を担うわけであるが，それを確実に果たしその成果を持ち寄ることで，一つの作品が成立するという意識が持てるように，こまめに声かけをするようにした。

（４）取り組みにあたって配慮したこと

・なるべく単純な活動にする。…活動への見通しを持ちやすくする。
・称揚により活動への意識を高める。…自己肯定感が高まり，自信を持って活動に取り組めるようにする。
・徐々に活動時間を伸ばす。…スモールステップで，集中できる時間が伸びるようにする。
・活動の振り返りをする。…活動の成果（正負両面）を自分で確認することで，次回の目標を立てやすくする。

（５）貼り絵の活動

①　活動内容

・色画用紙を手指で小さくちぎる。（図１）

図１　指先の巧緻性を磨く

・模造紙に下絵を書く。
・小さくちぎった色画用紙をのりで模造紙に貼る。（図２）

図２　共同作業

実際の取り組みにあたっては，次のような生徒の様子に注意しながら留意して取り組みを進めた。

② 活動時の生徒の様子

・人数が増えたことで，お互いの存在自体が刺激になっている。
・活動中に，お互いの作業を評価し合うような会話が増えた。
・作業能率が上がった。
・新たに活動に加わった生徒の活動を肯定するような評価が多かった。
・人数が増えたことで，和気あいあいにできるという感想があった。
・他の生徒の課題面よりもよい面を評価しようとする姿勢が目立った。

以上のことから，生徒同士が，お互いをプラスに評価し合える時間を設けて取り組む合同学習は，おおむねプラスの刺激を受けながら活動に取り組むことができている。その半面で，以下のような課題もあった。

・時間の経過とともに集中力が低下し，作業の精度も低下した。
・支援者が適宜場に介入しないと，攻撃的な態度で他者に接することが多かった。
・一旦一人の集中力が低下し場の空気が乱れると，他の生徒にも影響し，場面転換等を図るなどの対応が必要になり，長時間にわたり活動が中断することがあった。

（6）ペーパークラフトの活動

貼り絵の共同作業で大作となる一つの作品を完成させて，次のステップとしてペーパークラフトに取り組んだ。貼り絵の製作である程度の集中力や協調性の醸成に成果を感じており，活動内容を変えることでその成果をさらに幅広く伸ばすことが目的である。ただ，手先の巧緻性を高めるという点は，貼り絵と共通の目的に加え，作業の細かさをいっそう求めるようにした。また，共同作業としての意識は持てるようにしながらも，個人作業としてのウェートを高めるようにもした。そうすることで，自分の作業に自信を持っている生徒はさらに自分の作業に自信を深めることにつなげることができた。

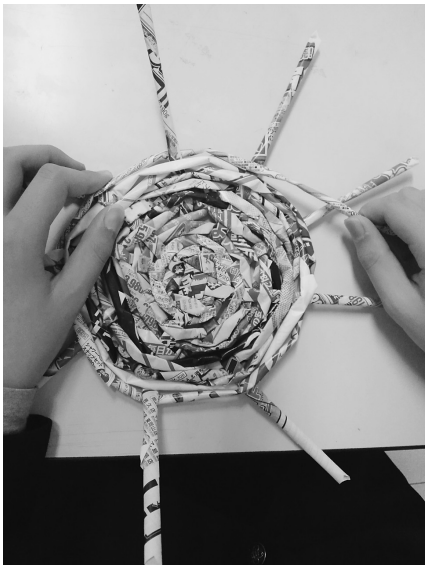
① 活動内容

・材料となる広告紙を丸めて「くるくる棒」を作る。ペーパークラフトも役割分担による共同作業という形をとるものの，基本的にはこのくるくる棒の製作と初歩的な作品作りは全員取り組むようにした。活動への見通しを持たせるために，ガイダンス的な意味合いを込めた。

図３　くるくる棒の製作

・くるくる棒を材料にして創作品を仕上げる。創作品は，個人の力量により，何を作るか自分で決めて取り組めるようにした。

図４　創作品（かご）の製作



② 活動にあたり配慮したこと

・単純な活動から複雑な活動へ。…活動内容を系統立ててレベルアップし技能面での向上をめざす。
・称揚により活動への意識を高める。…自己肯定感が高まり，自信を持って活動に取り組めるようにするために，小さな達成面でも称揚する。

・活動の振り返りをする。…活動の成果（正負両面）を自分で確認することで,次回の目標を立てやすくする。

③　活動時の生徒の様子

・作品を徐々に高度なものにしていくことで，作業精度の向上を自分で確認することができ，さらなる作業意欲の高まりにつながっている。

・活動への見通しは持てるが，作業精度が高くなると集中力が散漫になりやすい。作業精度を徐々に高め，スモールステップでじっくり時間をかけて単元に取り組む必要があると感じる。

（７）自立活動に道徳教育の観点を盛り込むことの意義

従来，自立活動の共通の目標として，①時間いっぱい集中して活動する，②細かい作業にもていねいに取り組む，の２つを設定しているが，それに③友達のがんばっているところを認める，を新たに加え，お互いのプラス面を評価し合えるような時間を設けるようにした。この目標を加えたことで，次のような変化が認められるようになった。

・お互いの存在自体が刺激になってプラス試行で活動に取り組めている。

・活動中に，お互いの作業を評価し合うような会話が増えた。

・作業能率が高まった。

これらのことから，学級の生徒同士が，お互いをプラスに評価し合える時間を設けて取り組む合同学習は，おおむねプラスの刺激を受けながら活動に取り組むことができていると考えられる。今回の取り組みは，自立活動という場の設定で道徳教育的な視点で目標を立てたわけであるが，場を共有しながら他の生徒の良い面を確認できるという点では一定の成果があったように思われる。

## ３．結　　果

個々の実態に合わせて，役割分担をして貼り絵の製作に取り組んだ。半年間継続して取り組み，以下のような課題を感じた。

・一定時間（１単位時間）集中して学習活動に取り組むことができにくい。根気強く集中力を持続させて取り組むという点が根本的で継続的な課題となっている。適宜休息をとるようにはしてきたが，やはり気分転換を図るような配慮は不可欠である。

・自分の価値判断に沿わない状況を受け入れることが難しく,パニック傾向になりやすい。この点については，自分の価値判断と全体の目標とをてんびんにかけながら，お互いの立場が尊重され，そこから客観的に活動場面を見つめ集団の中の一員であるという自覚が芽生えるように支援することが必要である。

これまでの生徒の実態から予想された課題であるが，取り組みを継続させたことで，徐々にではあるが場面に向き合う姿勢が定着してきた。それから場面を変えペーパークラフトに取り組んだわけであるが，目標の継続性と場面の新鮮さが同居することで，活動に対する興味・関心を高めたうえで，集中力をそのまま伸ばすことが可能となった。作品の出来栄えを自身で確認することで，作業面での課題を確認でき，次へのステップとして生かすことができた。（図５，図６）図６のように，作品の状態を自分の目で確認し，何が原因で出来栄えが不十分であったか考え，作業改善への手掛かりをもつことができた。課題となった作品を横に置き，常にそれと比較確認しながら次の作品作りに取り組むので，試行錯誤により手先の使い方に工夫が見られるようになり，驚くほど課題が克服されていった。やはり，目と手先の連動は非常に重要であることがあらためて理解できる結果となった。自閉的な傾向のある生徒にとって，活動内容に修正を加えるにあたっては，視覚的に課題要素を提示することは大原則であるといえる。

図５　完成作品から次の課題を知る

図６　課題修正後の作品

## 考　　察

今回の事例研究では，知的障害のある自閉症の生徒をその対象としてきた。個々の実態に配慮しながら，集団への帰属意識の高まりと心理的安定の関係の検証を進めてきた。実践結果から，以下にポイントをまとめてみたい。

まず，道徳教育が心理的安定に及ぼす影響についてである。筆者は日頃から生徒の実態を考慮した道徳授業を行っている（通常学級での交流授業を含む）。A，B，C，Dの４名の生徒間には善悪の判断を含め道徳面での実態には大きく開きがある。そのため，学校生活のさまざまな場面でトラブルが生じることがよくある。

・保健体育の授業で卓球をしていて，試合での負けを受け入れられずその後の活動に参加できなくなる。他人に対して否定的な言動を取ることが多くなる。
・英語の授業で英文和訳をしていて，他の生徒がヒントをくれたことに自尊心が傷つき，深く落ち込みその後の授業に参加できなくなる。
・授業中にまじめな態度で参加できず，学習に関係のないことを言ったり書いたりする生徒に，授業に集中している他の生徒がその態度に反感を持ち攻撃的な態度で接し，授業全体の雰囲気が乱れてしまう。
・給食時間に好き嫌いを他人から指摘されると，食事のペースが落ち，やがては食事をやめてしまう。
・掃除の時間に，自分の分担の仕事が終わり他を分担の生徒の手伝いをしようとしたところ断られ，気分が乱れ何も手につかなくなる。

他にも細かいトラブルは多く発生するが，上記の場面はいずれも別の生徒の，少し心に他者の立場を認める余裕があれば，大きく発展しないような心理的トラブルである。場面に共通しているのは，自閉的傾向のある生徒の行動特性としての，自己のこだわりに周囲からの接触を攻撃的な接触と捉え，疎外感を感じることにより心理的安定が乱れるというパターンが表れていると言える。これらの場面に直面した時，まず教科の授業中や掃除時間であってもその時間を割き，解決への糸口をつかむための取り組みをしたのち，その後きちんと解決するための道徳としての時間をじっくり確保して取り組むように二段階の場面設定をし指導・支援をしてきた。そして，その後直近する道徳の時間に改めてその課題場面にふれ，個々の生徒の心理面での解決を試みるように個別指導をしたのち，集団指導をするようにしている。その時に教師が生徒に対して発問する主なものとして次のような内容を場面ごとに反復して聞いてきた。

①友だちのここがいやだなあ，腹が立つなあと思うところはどんなところですか。（主観面）
②自分になくて友だちにあることはどんなことですか。（プラス・マイナス両面で）
③友だちのよいところはどんなところですか。（客観面）
④どうしたら今よりももっと仲よくできると思いますか。（理想像）

大体上記の流れで順に聞きながら，場面解決についながるように話し合いを行うようにした。①の主観面では，他者を攻撃・排除するような意見がほとんどであった。①から②，③に話し合いが進む時に，自分の気持ちを出し切り，すっきりした状態で次の場面に進むようにしている。そうすることで，②，③の問いかけに対して素直に他者を認める意見を出でることが多かった。そのような心理的に安定した状態で④の課題解決的なまとめをした。このように，トラブルが起こったときにリアルタイムで解決するという取り組みを反復的に行うことで，学級集団としてのまとまりは徐々にではあるが深まったと感じる。そして，この一連の取り組みを通して，次のような生徒の持っているプラスの内面性を強く感じた。

・他の生徒のマイナス面を先に話すことで，気持ちが落ち着き，その後の他者を見る目が素直になり，友好的なものの考え方ができる。そのことが，自分自身を素

直に見つめることにもつながっている。他者否定感は自己肯定感に容易に直結している。しかし，自己肯定感を育てることで他者肯定感も驚くほど容易に育てることができるということである。

・どのような特性の生徒でも，集団に帰属意識を持ち，その一員として認められたいという願いをもっている。そこからライバル心とともに向上心も育っている。
・これから同じ失敗を繰り返したくないという向上心が生徒自身の社会性を成長させている。

特別支援学級における道徳教育の利点は，生徒の素直な心を引き出しやすいという点である。まず自分の率直な思いを吐き出させる(他者に対するマイナス的な考え)ことで，支援者のアドバイスを素直に受け止める心理的な安定感が生じ，他者を肯定的に捉えようとする姿勢でトラブル後の場面に臨むことができたことは非常に大きい。自分の思いを率直に表現する（言葉,身振りなどで）ことで心理面でのバランスを保つことが容易であるとともに，他者の立場を認める素地を築きやすい。その結果として，集団内での自分の居心地を高め，他者を思いやる心が育っていくと思われる。今後も，このような視点に立ち，道徳教育を継続させることは個々の生徒の集団への帰属意識を高め，他者を思いやる心を育むには効果的であると考えられる。学校生活場面で，生徒間の心理的トラブルは突発的でいつどこで発生するか全く予測がつかないことが多いが，発生時に直ちに解決に向けての道徳的アプローチをすることは，生徒自身がトラブルの原因を知り，それをどのように解決していくかいその糸口を容易につかませることができる。

次に，今回の実践の特質として，自立活動に道徳教育的観点をもって系統的な取り組みをしたことである。自立活動の目標が個々の生徒の障害特性を改善し生きる力を養う点にあることは言うまでもないが，その場面に道徳教育的観点を随時盛り込んだことで，集団としての自立活動の目標や個々の生徒の目標を相乗的に高めることができたといえる。今回の自立活動の集団目標として次の三つを掲げて取り組んだ。

・時間いっぱい集中して活動する。
・細かい作業にもていねいに取り組む。
・友達のがんばっているところを認める。

個々の生徒が作業そのものに対する個人目標を達成することで，活動に対する成就感をもち，それが自己の心理的安定を高めることにもつながった。そして，お互いのプラス面を評価し合えるような時間を設けたことで，トラブルからの立ち直りの時間は確実に短くなった。

日常の学校生活場面で，異なる目標をもった活動を系統立てて取り組むことは集団の力学をよりアクティブにし，個々の心理的安定に好影響をあたえることにつながると考えられる。

## 文　　献

（１）大沼直樹・吉利宗久（2005）　特別支援教育の理論と方法　倍風館
（２）坂本龍生・田川元康・竹田契一・松本治雄・安藤忠（1992）　障害児指導の方法　学苑社
（３）佐々木正美（1993）　自閉症療育ハンドブック　学研
（４）須田治（2009）　情動的な人間関係の問題への対応　金子書房
（５）高木隆郎（2009）　自閉症　星和書店